

# 陰翳礼讃

谷崎潤一郎

青空文庫





今日、普請道楽の人が純日本風の家屋を建てて住まおうとする  
と、電気や瓦斯<sup>ガス</sup>や水道等の取付け方に苦心を払い、何とかしてそ  
れらの施設が日本座敷と調和するように工夫を凝らす風があるの  
は、自分で家を建てた経験のない者でも、待合料理屋旅館等の座  
敷へ這入ってみれば常に気が付くことであろう。独りよがりの茶  
人などが科学文明の恩沢を度外視して、辺鄙な田舎にでも草庵を  
営むなら格別、いやしくも相当の家族を擁して都会に住居する以  
上、いくら日本風にするからと云って、近代生活に必要な暖房や

照明や衛生の設備を斥ける訳には行かない。で、凝り性の人は電  
話一つ取り附けるにも頭を悩まして、梯子段の裏とか、廊下の隅  
とか、出来るだけ目障りにならない場所に持つて行く。その他庭  
の電線は地下線にし、部屋のスイッチは押入れや地袋の中に隠し、  
コードは屏風びょうぶの蔭を這わす等、いろ／＼考えた揚句、中には神  
経質に作為をし過ぎて、却つてうるさく感ぜられるような場合も  
ある。実際電燈などはもうわれ／＼の眼の方が馴れツこになつて  
しまつているから、なまじなことをするよりは、あの在来の乳白  
ガラスの浅いシェードを附けて、球をムキ出しに見せて置く方が、  
自然で、素朴な氣持もする。夕方、汽車の窓などから田舎の景色  
を眺めている時、茅葺きの百姓家の障子の蔭に、今では時代おく

れのしたあの浅いシールドを附けた電球がぽつんと燈っているのを見ると、風流にさえ思えるのである。しかし煽風器などと云うものになると、あの音響と云い形態と云い、未だに日本座敷とは調和しにくい。それも普通の家庭なら、イヤなら使わなくても済むが、夏向き、客商売の家などでは、主人の趣味にばかり媚びる訳に行かない。私の友人の偕楽園主人は随分普請に凝る方であるが、煽風器を嫌って久しい間客間に取り附けずにくところ、毎年夏になると客から苦情が出るために、結局我を折って使うようになつてしまった。かく云う私なども、先年身分不相応な大金を投じて家を建てた時、それに似たような経験を持っているが、細かい建具や器具の末まで気にし出したら、種々な困難に行きあた

る。たとえば障子一枚にしても、趣味から云えばガラスを簞めた  
くないけれども、そうかと云つて、徹底的に紙ばかりを使おうと  
すれば、採光や戸締まり等の点で差支えが起る。よんどころなく  
内側を紙貼りにして、外側をガラス張りにする。そうするため  
は表と裏と棧を二重にする必要があり、従つて費用も嵩かさむのであ  
るが、さてそんなにまでしてみても、外から見ればたゞのガラス  
戸であり、内から見れば紙のうしろにガラスがあるので、やはり  
本当の紙障子のようなふつくらしした柔かみがなく、イヤ味なもの  
になりがちである。そのくらいならたゞのガラス戸にした方がよ  
かつたと、やつとその時に後悔するが、他人の場合は笑えても、  
自分の場合は、そこまでやってみないことには中々あきらめが付

きにくい。近来電燈の器具などは、行燈式のもの、提燈式のもの、八方式のもの、燭台式のもの等、日本座敷に調和するものがいろいろ売り出されているが、私はそれでも気に入らないで、昔の石油ランプや有明行燈や枕行燈を古道具屋から捜して来て、それへ電球を取り附けたりした。分けても苦心したのは暖房の設計であった。と云うのは、およそストーヴと名のつくもので日本座敷に調和するような形態のものは一つもない。その上瓦斯<sup>ガス</sup>ストーヴはぼう／＼燃える音がするし、また煙突でも付けないことにはじきに頭痛がして来るし、そう云う点では理想的だと云われる電気ストーヴにしても、形態の面白くないことは同様である。電車ですべているようなヒーターを地袋の中へ取り附けるのは一策だけ

ども、やはり赤い火が見えないと、冬らしい気分にならないし、家族の団欒にも不便である。私はいろ／＼智慧を絞って、百姓家にあるような大きな炉を造り、中へ電気炭を仕込んでみたが、これは湯を沸かすにも部屋を温めるにも都合がよく、費用が嵩むと云う点を除けば、様式としてはまず成功の部類であつた。で、煖房の方はそれでどうやら巧く行くけれども、次に困るのは、浴室と厠かわやである。偕楽園主人は浴槽や流しにタイルを張ることを嫌がって、お客用の風呂場を純然たる木造にしているが、経済や実用の点からは、タイルの方が万々優っていることは云うまでもない。たゞ、天井、柱、羽目板等に結構な日本材を使った場合、一部分をあのケバケバしいタイルにしては、いかにも全体との映りが悪



い。出来たてのうちはまだいゝが、追いつく年数が経って、板や柱に木目もくめの味が出て来た時分、タイルばかりが白くつるゝに光っていられたら、それこそ木に竹を接いだようである。でも浴室は、趣味のために実用の方を幾分犠牲に供しても済むけれども、厠になると、一層厄介な問題が起るのである。



私は、京都や奈良の寺院へ行つて、昔風の、うすぐらい、そうしてしかも掃除の行き届いた厠へ案内される毎に、つく／＼日本建築の有難みを感じる。茶の間もいゝにはいゝけれども、日本

の厠は実に精神が安まるように出来ている。それらは必ず母屋おもやから離れて、青葉の匂や苔の匂のして来るような植え込みの蔭に設けてあり、廊下を伝わって行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうずくまって、ほんのり明るい障子の反射を受けながら瞑想に耽り、または窓外の庭のけしきを眺める気持は、何とも云えない。漱石先生は毎朝便通に行かれることを一つの楽しみに数えられ、それは寧ろ生理的快感であると云われたそうだが、その快感を味わう上にも、閑寂な壁と、清楚な木目に囲まれて、眼に青空や青葉の色を見ることの出来る日本の厠ほど、恰好な場所はあるまい。そうしてそれには、繰り返して云うが、或る程度の薄暗さと、徹底的に清潔であることと、蚊の呻うなりさえ耳につくような

静かさが、必須の条件なのである。私はそう云う厠にあつて、しとくと降る雨の音を聴くのを好む。殊に関東の厠には、床に細長い掃き出し窓がついてるので、軒端や木の葉からしたゝり落ちる点滴が、石燈籠の根を洗い飛び石の苔を湿おしつゝ土に沁み入るしめやかな音を、ひとしお身に近く聴くことが出来る。まことに厠は虫の音によく、鳥の声によく、月夜にもまたふさわしく、四季おり／＼の物のあわれを味わうのに最も適した場所であつて、恐らく古来の俳人は此処から無数の題材を得ているであろう。されば日本の建築の中で、一番風流に出来ているのは厠であるとも云えなくはない。総べてのものを詩化してしまう我等の祖先は、住宅中で何処よりも不潔であるべき場所を、却つて、雅致

のある場所に変え、花鳥風月と結び付けて、なつかしい連想の中へ包むようにした。これを西洋人が頭から不浄扱いにし、公衆の前で口にすることをさえ忌むのに比べれば、我等の方が遙かに賢明であり、真に風雅の骨髓を得ている。強いて缺点を云うならば、母屋から離れているために、夜中に通うには便利が悪く、冬は殊に風邪を引く憂いがあることだけれども、「風流は寒きものなり」と云う斎藤緑雨の言の如く、あゝ云う場所は外気と同じ冷たさの方が気持がよい。ホテルの西洋便所で、スチームの温気がして来るなどは、まことにイヤなものである。ところで、数寄屋普請を好む人は、誰しもこう云う日本流の廁を理想とするであろうが、寺院のように家の広い割りに人数が少く、しかも掃除の手が揃つ

ている所はいゝが、普通の住宅で、あゝ云う風に常に清潔を保つことは容易でない。取り分け床を板張りや畳にすると、礼儀作法をやかましく云い、雑巾がけを励行しても、つい汚れが目立つのである。で、これも結局はタイルを張り詰め、水洗式のタンクや便器を取り附けて、浄化装置にするのが、衛生的でもあれば、手数も省けると云うことになるが、その代り「風雅」や「花鳥風月」とは全く縁が切れてしまう。彼処がそんな風にぱつと明るくて、おまけに四方が真っ白な壁だらけでは、漱石先生のいわゆる生理的快感を、心ゆく限り享樂する気分になりにくい。なるほど、隅から隅まで純白に見え渡るのだから確かに清潔には違いないが、自分の体から出る物の落ち着き先について、そうまで念を押さず

とものことである。いくら美人の玉の肌でも、お臀や足を人前へ出しては失礼であると同じように、あゝムキ出しに明るくするのはあまりと云えば無躰千万、見える部分が清潔であるだけ見えな部分の連想を挑発させるようにもなる。やはりあゝ云う場所は、もやくとした薄暗がりの光線で包んで、何処から清浄になり、何処から不浄になるとも、はじめを朦朧もうろうとぼかして置いた方がよい。まあそんな訳で、私も自分の家を建てる時、浄化装置にはしたものの、タイルだけは一切使わぬようにして、床には楠の板を張り詰め、日本風の感じを出すようにしてみたが、さて困ったのは便器であつた。と云うのは、御承知の如く、水洗式のもの皆真っ白な磁器で出来ていて、ピカピカ光る金属製の把手などが

附いている。ぜんたい私の注文を云えば、あの器は、男子用のも、女子用のも、木製の奴が一番いゝ。蠟塗りにしたのは最も結構だが、木地のまゝでも、年月を経るうちには適当に黒ずんで来て、木目が魅力を持つようになり、不思議に神経を落ち着かせる。分けてもあの、木製の朝顔に青々とした杉の葉を詰めたのは、眼に快いばかりでなく些の音響をも立てない点で理想的と云うべきである。私はあゝ云う贅沢な真似は出来ないまでも、せめて自分の好みに叶った器を造り、それへ水洗式を応用するようにしてみたかと思つたのだが、そう云うものを特別に誂えると、よほどの手間と費用が懸るのであきらめるより外はなかつた。そしてその時に感じたのは、照明にしろ、煖房にしろ、便器にしろ、文明の利

器を取り入れるのに勿論異議はないけれども、それならそれで、なぜもう少しわれ／＼の習慣や趣味生活を重んじ、それに順応するように改良を加えないのであろうか、と云う一事であつた。



既に行燈式の電燈が流行り出して来たのは、われ／＼が一時忘れていた「紙」と云うものの持つ柔かみと温かみに再び眼ざめた結果であり、それの方がガラスよりも日本家屋に適することを認めて来た証拠であるが、便器やストーヴは、今以てじっくり調和するような形式のものが売り出されていない。暖房は私が試みた



ように炉の中へ電気炭を仕込むのが一番いゝように思うけれども、かゝる簡単な工夫をすら施そうとする者がなく、（貧弱な電気火鉢と云うものはあるが、あれは暖房の用をなさないこと、普通の火鉢と同じである）出来合いの品と云えば、皆あの不恰好な西洋風の暖炉である。が、こう云う些末な衣食住の趣味について彼れ此れと気を遣うのは贅沢である。寒暑や飢餓を凌ぐにさえ足りれば様式などは問う所でないと言ふ人もあろう。事実、いくら瘦せ我慢を試してみても「雪の降る日は寒くこそあれ」で眼前に便利な器具があれば、風流不風流を論じている暇はなく、滔々としてその恩沢に浴する気になるのは、已むを得ない趨勢であるけれども、私はそれを見るにつけても、もし東洋に西洋とは全然別箇の、独

自の科学文明が発達していたならば、どんなにわれ々の社会の有様が今日とは違ったものになつていたのであろうか、と云うことを常に考えさせられるのである。たとえば、もしわれ々がわれわれ独自の物理学を有し、化学を有していたならば、それに基づく技術や工業もまた自ら別様の発展を遂げ、日用百般の機械でも、薬品でも、工藝品でも、もつとわれ々の国民性に合致するような物が生れてはいなかつたであらうか。いや、恐らくは、物理学そのもの、化学そのものの原理さえも、西洋人の見方とは違った見方をし、光線とか、電気とか、原子とかの本質や性能についても、今われ々が教えられているようなものとは、異つた姿を露呈していたかも知れないと思われる。私にはそう云う学理的のこ

とは分らないから、たゞぼんやりとそんな想像を逞しゆうするだけであるが、しかし少くとも、實用方面の発明が獨創的の方向を辿つていたとしたならば、衣食住の様式は勿論のこと、引いてはわれらの政治や、宗教や、藝術や、実業等の形態にもそれが廣汎な影響を及ぼさない筈はなく、東洋は東洋で別箇の乾坤を打開したのである。容易に推測し得られるのである。卑近な例を取つてみると、私はかつて「文藝春秋」に万年筆と毛筆との比較を書いたが、仮りに万年筆と云うものを昔の日本人か支那人が考案したとしたならば、必ず穂先をペンにしないで毛筆にしたであらう。そしてインキもあゝ云う青い色でなく、墨汁に近い液体にして、それが軸から毛の方へ滲み出るように工夫したであらう。

さすれば、紙も西洋紙のようなものでは不便であるから、大量生産で製造するとしても、和紙に似た紙質のもの、改良半紙のようなものが最も要求されたであろう。紙や墨汁や毛筆がそう云う風に発達していたら、ペンやインキが今日の如き流行を見ることはなかつたであろうし、従つてまたローマ字論などが幅を利かすことも出来まいし、漢字や仮名文字に対する一般の愛着も強かつたであろう。いや、そればかりでない、我等の思想や文学さえも、或はこうまで西洋を模倣せず、もつと独創的な新天地へ突き進んでいたかも知れない。かく考えて来ると、些細な文房具ではあるが、その影響の及ぶところは無辺際に大きいのである。



そう云うことを考えるのは小説家の空想であつて、もはや今日になつてしまつた以上、もう一度逆戻りをしてやり直す訳に行かないことは分りきつてゐる。だから私の云うことは、今更不可能事を願ひ、愚痴をこぼすのに過ぎないのであるが、愚痴は愚痴として、とにかく我等が西洋人に比べてどのくらい損をしているかと云うことは、考えてみても差支えあるまい。つまり、一と口に云うと、西洋の方は順当な方向を辿つて今日に到達したのであり、我等の方は、優秀な文明に逢着してそれを取り入れざるを得なかつた代りに、過去数千年来発展し來つた進路とは違つた方向へ歩

み出すようになった、そこからいろ／＼な故障や不便が起つてい  
ると思われる。尤もわれ／＼を放っておいたら、五百年前も今日  
も物質的には大した進展をしていなかったかも知れない。現に支  
那や印度インドの田舎へ行けば、お釈迦様や孔子様の時代とあまり変ら  
ない生活をしているでもあろう。だがそれにしても自分たちの性  
に合つた方向だけは取つていたであらう。そして緩慢にはある  
が、いくらかずつの進歩をつゞけて、いつかは今日の電車や飛行  
機やラジオに代るもの、それは他人の借り物でない、ほんとうに  
自分たちに都合のいゝ文明の利器を発見する日が来なかつたとは  
限るまい。早い話が、映画を見ても、アメリカのものと、佛蘭西フランス  
や独逸ドイツのものとは、陰翳いんえいや、色調の工合が違つている。演技と

か脚色とかは別にして、写真面だけで、何処かに国民性の差異が出ています。同一の機械や薬品やフィルムを使ってもなおかつそうなのであるから、われ〜に固有の写真術があつたら、どんなにわれ〜の皮膚や容貌や気候風土に適したものであつたかと思う。蓄音器やラジオにしても、もしわれ〜が発明したなら、もつとわれ〜の声や音楽の特長を生かすようなものが出来たであろう。元来われ〜の音楽は、控え目なものであり、気分本位のものであるから、レコードにしたり、拡声器で大きくしたりしたのでは、大半の魅力が失われる。話術にしてもわれ〜の方のは声が小さく、言葉数が少く、そうして何よりも「間」が大切なのであるが、機械にかけたら「間」は完全に死んでしまう。そこでわれ〜は、

機械に迎合するように、却つてわれ々の藝術自体を歪めて行く。西洋人の方は、もともと自分たちの間で発達させた機械であるから、彼等の藝術に都合がいゝように出来ているのは当り前である。そう云う点で、われ々は実にいろく損をしていると考えられる。



紙と云うものは支那人の発明であると聞くが、われ々は西洋紙に対すると、単なる実用品と云う以外に何の感じも起らないけれども、唐紙や和紙の肌理きめを見ると、そこに一種の温かみを感じ、



心が落ち着くようになる。同じ白いのでも、西洋紙の白さと奉書や白唐紙の白さとは違う。西洋紙の肌は光線を撥ね返すような趣があるが、奉書や唐紙の肌は、柔かい初雪の面のように、ふつくらと光線の中へ吸い取る。そうして手ざわりがしなやかであり、折つても畳んでも音を立てない。それは木の葉に触れているのと同じように物静かで、しつとりしている。ぜんたいわれ／＼は、ピカピカ光るものを見ると心が落ち着かないのである。西洋人は食器などにも銀や鋼鉄やニツケル製のものを用いて、ピカピカ光る様に研みがき立てるが、われ／＼はあゝ云う風に光るものを嫌う。われ／＼の方でも、湯沸しや、杯や、銚子等に銀製のものを用いることはあるけれども、あゝ云う風に研き立てない。却って表面

の光りが消えて、時代がつき、黒く焼けて来るのを喜ぶのであつて、心得のない下女などが、折角さびの乗つて来た銀の器をピカピカに研いたりして、主人に叱られることがあるのは、何処の家庭でも起る事件である。近来、支那料理の食器は一般に錫製のものが使われているが、恐らく支那人はあれが古色を帯びて来るのを愛するのであろう。新しい時はアルミニウムに似た、あまり感じのいゝものではないが、支那人が使うとあゝ云う風に時代をつけ、雅味のあるものにしてしまわなければ承知しない。そしてあの表面に詩の文句などが彫つてあるのも、肌が黒ずんで来るに従い、しつくりと似合うようになる。つまり支那人の手にかゝると、薄ツペらでピカピカする錫と云う軽金属が、朱泥のように深

みのある、沈んだ、重々しいものになるのである。支那人はまた玉ぎよくと云う石を愛するが、あの、妙に薄濁りのした、幾百年もの古い空気が一つに凝結したような、奥の奥の方までどろんとした鈍い光りを含む石のかたまりに魅力を感じるのは、われ／＼東洋人だけではないであろうか。ルビーやエメラルドのような色彩があるのでもなければ、金剛石のような輝きがあるのでもないあゝ云う石の何処に愛着を覚えるのか、私たちにもよく分らないが、しかしあのどんよりした肌を見ると、いかにも支那の石らしい気がし、長い過去を持つ支那文明の滓おりがあの厚みのある濁りの中に堆積しているように思われ、支那人があゝ云う色沢や物質を嗜好するの不思議はないと云うことだけは、頷ける。水晶などにして

も、近頃は智利チリから沢山輸入されるが、日本の水晶に比べると、智利チリのはあまりきれいに透きとおりが過ぎていて、昔からある甲州産の水晶と云うものは、透明の中にも、全体にほんのりとした曇りがあつて、もつと重々しい感じがするし、草入り水晶などと云つて、奥の方に不透明な固形物の混入しているのを、寧ろわれ／＼は喜ぶのである。ガラスでさえも、支那人の手に成つた乾隆グラスと云うものは、ガラスと云うよりも玉ぎよくか瑪瑙めのうに近いではないか。玻璃を製造する術は早くから東洋にも知られていながら、それが西洋のように発達せず終り、陶器の方が進歩したのは、よほどわれ／＼の国民性に関係する所があるに違いない。われ／＼は一概に光るものが嫌いと言ふ訳ではないが、浅く冴えたものよ

りも、沈んだ翳<sup>かげ</sup>りのあるものを好む。それは天然の石であろうと、人工の器物であろうと、必ず時代のつやを連想させるような、濁りを帯びた光りなのである。尤も時代のつやなどと云うとよく聞えるが、実を云えば手垢の光りである。支那に「手沢」と云う言葉があり、日本に「なれ」と云う言葉があるのは、長い年月の間に、人の手が触つて、一つ所をつる／＼撫でているうちに、自然と脂が沁み込んで来るようになる、そのつやを云うのだらうから、云い換えれば手垢に違いない。して見れば、「風流は寒きもの」であると同時に、「むさきものなり」と云う警句も成り立つ。とにかくわれ／＼の喜ぶ「雅致」と云うものの中には幾分の不潔、かつ非衛生的分子があることは否まれない。西洋人は垢を根こそ

ぎ癢き立てて取り除こうとするのに反し、東洋人はそれを大切に保存して、そのまゝ美化する、と、まあ負け惜しみを云えば云うところだが、因果なことに、われ／＼は人間の垢や油煙や風雨のよごれが附いたもの、乃至はそれを想い出させるような色あいや光沢を愛し、そう云う建物や器物の中に住んでいると、奇妙に心が和やいで来、神経が安まる。それで私はいつも思うのだが、病院の壁の色や手術服や医療機械なんかも、日本人を相手にする以上、あゝピカピカするものや真っ白なものばかり並べないで、もう少し暗く、柔かみを附けたらどうであろう。もしあの壁が砂壁か何かで、日本座敷の畳の上に臥ねながら治療を受けるのであったら、患者の興奮が静まることは確かである。われ／＼が齒医者へ

行くのを嫌うのは、一つにはがりくぐると云う音響にも因るが、一つにはガラスや金属製のピカピカする物が多過ぎるので、それに怯えるせいもある。私は神経衰弱の激しかった時分、最新式の設備を誇るアメリカ帰りの歯医者と聞くと、却って恐毛をふるったものだった。そして田舎の小都会などにある、昔風の日本家屋に手術室を設けた、時代後れのしたような歯医者の方へ好んで出かけた。そうかと云って、古色を帯びた医療機械なんかも困ることは困るが、もし近代の医術が日本で成長したのであったら、病人を扱う設備や機械も、何とか日本座敷に調和するように考案されていたであろう。これもわれ／＼が借り物のために損をしている一つの例である。



京都に「わらんじや」と云う有名な料理屋があつて、こゝの家では近頃まで客間に電燈をともさず、古風な燭台を使うのが名物になつていたが、ことしの春、久しぶりで行ってみると、いつの間にか行燈式の電燈を使うようになっていた。いつからこうしたのかと聞くと、去年からこれにいたしました。蠟燭の灯ではあまり暗すぎると仰っしゃるお客様が多いものでござりますから、抛んどころなくこう云う風に致しましたが、やはり昔のまゝの方がよいと仰っしゃるお方には、燭台を持って参りますと云う。で、



折角それを楽しみにして来たのであるから、燭台に替えて貰ったが、その時私が感じたのは、日本の漆器の美しさは、そう云うほんやりした薄明りの中に置いてこそ、始めてほんとうに発揮されると云うことであつた。「わらんじや」の座敷と云うのは四畳半ぐらいの小じんまりした茶席であつて、床柱や天井なども黒光りに光っているから、行燈式の電燈でも勿論暗い感じがする。が、それを一層暗い燭台に改めて、その穂のゆらくとまたたく蔭にある膳や椀を視詰めてみると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今までとは違った魅力を帯び出して来るのを発見する。そしてわれ々の祖先がうるしと云う塗料を見出し、それを塗った器物の色沢に愛着を覚えたことの偶然で

ないのを知るのである。友人サバルワル君の話に、印度では現在でも食器に陶器を使うことを卑しめ、多くは塗り物を用いると云う。われ／＼はその反対に、茶事とか、儀式とかの場合でなければ、膳と吸い物椀の外は殆ど陶器ばかりを用い、漆器と云うと、野暮くさい、雅味のないものにされてしまっているが、それは一つには、採光や照明の設備がもたらした「明るさ」のせいではないであろうか。事実、「闇」を条件に入れなければ漆器の美しさは考えられないと云っている。今日では白漆と云うようなものも出来たけれども、昔からある漆器の肌は、黒か、茶か、赤であつて、それは幾重もの「闇」が堆積した色であり、周囲を包む暗黒の中から必然的に生れ出たもののように思える。派手な蒔絵まきえなど

を施したピカピカ光る蠟塗りの手箱とか、文台とか、棚とかを見ると、いかにもケバケバしくて落ち着きがなく、俗悪にさえ思えることがあるけれども、もしそれらの器物を取り囲む空白を真っ黒な闇で塗り潰し、太陽や電燈の光線に代えるに一点の燈明か蠟燭のあかりにして見給え、忽ちそのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重々しいものになるであろう。古えの工藝家がそれらの器に漆を塗り、蒔絵を画く時は、必ずそう云う暗い部屋を頭に置き、乏しい光りの中における効果を狙ったのに違いなく、金色を贅沢に使ったりしたのも、それが闇に浮かび出る工合や、燈火を反射する加減を考慮したものと察せられる。つまり金蒔絵は明るい所で一度にぱっとその全体を見るものではなく、暗い所で

いろ／＼の部分がとき／＼少しずつ底光りするのを見るように出来ているのであつて、豪華絢爛な模様の大半を闇に隠してしまつてゐるのが、云い知れぬ餘情を催すのである。そして、あのピカピカ光る肌をつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、静かな部屋にもおり／＼風のおとずれのあることを教えて、そゞろに人を瞑想に誘い込む。もしあの陰鬱な室内に漆器と云うものがなかつたなら、蠟燭や燈明の醸し出す怪しい光りの夢の世界が、その灯のはためきが打っている夜の脈搏が、どんなに魅力を減殺されることであろう。まことにそれは、畳の上に幾すじもの小川が流れ、池水が湛えられている如く、一つの灯影を此処彼処に捉えて、細く、かそけく、ちら／＼と伝え

ながら、夜そのものに蒔絵をしたような綾を織り出す。けだし食器としては陶器も悪くないけれども、陶器には漆器のような陰翳がなく、深みがない。陶器は手に触れると重く冷たく、しかも熱を伝えることが早いので熱い物を盛るのに不便であり、その上力チカチと云う音がするが、漆器は手ざわりが軽く、柔かで、耳につく程の音を立てない。私は、吸い物椀を手を持った時の、掌が受ける汁の重みの感覚と、生あたくかい温味ぬくみとを何よりも好む。それは生れたての赤ん坊のぷよぷよした肉体を支えたような感じでもある。吸い物椀に今も塗り物が用いられるのは全く理由のあることであつて、陶器の容れ物ではあゝは行かない。第一、蓋を取った時に、陶器では中にある汁の身や色合いが皆見えてしまう。

漆器の椀のいゝことは、まずその蓋を取って、口に持って行くまでの間、暗い奥深い底の方に、容器の色と殆ど違わない液体が音もなく澱んでいるのを眺めた瞬間の気持である。人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることは出来ないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上に感じ、椀の縁がほんのり汗を掻いているので、そこから湯気が立ち昇りつゝあることを知り、その湯気が運ぶ匂に依って口に啣くむ前にぼんやり味わいを豫覚する。その瞬間の心持、スープを浅い白ちやけた皿に入れて出す西洋流に比べて何と云う相違か。それは一種の神秘であり、禅味であるとも云えなくはない。



私は、吸い物椀を前にして、椀が微かに耳の奥へ沁むようにジ  
イと鳴っている、あの遠い虫の音のようなおとを聴きつゝこれか  
ら食べる物の味わいに思いをひそめる時、いつも自分が三昧境に  
惹き入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎるおとに尾上の松風  
を連想しながら無我の境に入ると云うのも、恐らくそれに似た心  
持なのであろう。日本の料理は食うものでなくて見るものだと云  
われるが、こう云う場合、私は見るものである以上に瞑想するも  
のであると云おう。そうしてそれは、闇にまたゝく蠟燭の灯と漆  
の器とが合奏する無言の音楽の作用なのである。かつて漱石先生

は「草枕」の中で羊ようかん羹の色を讚美しておられたことがあつたが、  
そう云えばあの色などはやはり瞑想的ではないか。玉ぎよくのように半  
透明に曇った肌が、奥の方まで日の光りを吸い取つて夢みる如き  
ほの明るさを啣んでいる感じ、あの色あいの深さ、複雑さは、西  
洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどはあれに比べると  
何と云う浅はかさ、単純さであろう。だがその羊羹の色あいも、  
あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる  
暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑か  
なものを口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊に  
なつて舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹で  
も、味に異様な深みが添わるように思う。けだし料理の色あいは



何処の国でも食器の色や壁の色と調和するように工夫されているのであろうが、日本料理は明るい所で白ツちやけた器で食べては慥かに食欲が半減する。たとえばわれ／＼が毎朝たべる赤味噌の汁なども、あの色を考えると、昔の薄暗い家の中で発達したものであることが分る。私は或る茶会に呼ばれて味噌汁を出されたことがあつたが、いつもは何でもなくたべていたあのどろ／＼の赤土色をした汁が、覚束ない蠟燭のあかりの下で、黒うるしの椀に澱んでいるのを見ると、実に深みのある、うまそうな色をしているのであつた。その外醤油などにしても、上方では刺身や漬物やおひたしには濃い口の「たまり」を使うが、あのねっとりとしたつやのある汁がいかに陰翳に富み、闇と調和することか。また白

味噌や、豆腐や、蒲鉾や、とろゝ汁や、白身の刺身や、あゝ云う  
白い肌のものも、周囲を明るくしたのでは色が引き立たない。第  
一飯にしてからが、ぴか／＼光る黒塗りの飯櫃めしびつに入れられて、  
暗い所に置かれていゝ方が、見ても美しく、食欲をも刺戟する。  
あの、炊きたての真っ白な飯が、ぱつと蓋を取った下から煖かそ  
うな湯気を吐きながら黒い器に盛り上つて、一と粒一と粒真珠の  
ようにかゞやいているのを見る時、日本人なら誰しも米の飯の有  
難さを感じるであらう。かく考えて来ると、われ／＼の料理が常  
に陰翳を基調とし、闇と云うものと切つても切れない関係にある  
ことを知るのである。



私は建築のことについては全く門外漢であるが、西洋の寺院のゴシック建築と云うものは屋根が高くく尖つて、その先が天に冲せんとしているところに美観が存するのだと云う。これに反して、われ々の国の伽藍では建物の上にまず大きな葺を伏せて、その庇ひさしが作り出す深い廣い蔭の中へ全体の構造を取り込んでしまふ。寺院のみならず、宮殿でも、庶民の住宅でも、外から見て最も眼立つものは、或る場合には瓦葺き、或る場合には茅葺きの大きな屋根と、その庇の下にたゞよう濃い闇である。時とすると、白昼といえども軒から下には洞穴のような闇が繞つていて戸口も

扉も壁も柱も殆ど見えないことすらある。これは知恩院や本願寺のような宏壮な建築でも、草深い田舎の百姓家でも同様であつて、昔の大概な建物が軒から下と軒から上の屋根の部分とを比べると、少くとも眼で見たところでは、屋根の方が重く、堆く、面積が大きく感ぜられる。左様にわれ／＼が住居を営むには、何よりも屋根と云う傘を拡げて大地に一廓の日かげを落とし、その薄暗い陰翳の中に家造りをする。もちろん西洋の家屋にも屋根がない訳ではないが、それは日光を遮蔽するよりも雨露をしのぐための方が主であつて、蔭はなるべく作らないようにし、少しでも多く内部を明りに曝すようにしていることは、外形を見ても領かれる。日本の屋根を傘とすれば、西洋のそれは帽子でしかない。しかも鳥打

帽子のように出来るだけ鰐つばを小さくし、日光の直射を近々と軒端に受ける。けだし日本家の屋根の庇が長いのは、気候風土や、建築材料や、その他いろいろの関係があるであろう。たとえば煉瓦やガラスやセメントのようなものを使わないところから、横なぐりの風雨を防ぐためには庇を深くする必要があつたであろうし、日本人とて暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違いないが、是非なくあゝなつたのもあろう。が、美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至つた。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依つて生れているので、それ以外に何

もない。西洋人が日本座敷を見てその簡素なのに驚き、たゞ灰色の壁があるばかりで何の装飾もないと云う風に感じるのは、彼等としてはいかさま尤もであるけれども、それは陰翳の謎を解しないからである。われ／＼は、それでなくても太陽の光線の這入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を附けたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むようにする。われ／＼の座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。われ／＼は、この力のない、わびしい、果敢<sup>はか</sup>ない光線が、しんみり落ち着いて座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。土蔵とか、厨とか、廊下のようなところへ塗るには照りをつけるが、座敷の壁は殆ど

砂壁で、めつたに光らせない。もし光らせたら、その乏しい光線の、柔かい弱い味が消える。われ等は何処までも、見るからにおぼつかない外光が、黄昏色の壁の面に取り着いて辛くも餘命を保っている、あの繊細な明るさを樂しむ。我等に取ってはこの壁の上の明るさ或はほのぐらさが何物の裝飾にも優るのであり、しみ／＼と見飽きがしないのである。さればそれらの砂壁がその明るさを乱さないようにとたゞ一と色の無地に塗つてあるのも当然であつて、座敷毎に少しずつ地色は違ふけれども、何とその違いの微妙であることよ。それは色の違いと云うよりもほんの僅かな濃淡の差異、見る人の気分の相違と云う程のものでしかない。しかもその壁の色のほのかな違いに依つて、また幾らかずつ各

の部屋の陰翳が異なつた色調を帯びるのである。尤も我等の座敷にも床の間と云うものがあつて、掛け軸を飾り花を活けるが、しかしそれらの軸や花もそれ自体が装飾の役をしているよりも、陰翳に深みを添える方が主になっている。われらは一つの軸を掛けるにも、その軸物とその床の間の壁との調和、即ち「床うつり」を第一に貴ぶ。われらが掛け軸の内容を成す書や絵の巧拙と同様の重要さを裱ひょうぐ具ぐに置くのも、実にそのためであつて、床うつりが悪かつたら如何なる名書画も掛け軸としての価値がなくなる。それと反対に一つの独立した作品としては大した傑作でもないよな書画が、茶の間の床に掛けてみると、非常にその部屋との調和がよく、軸も座敷も俄かに引き立つ場合がある。そしてそう云



う書画、それ自身としては格別のものでもない軸物の何処が調和するのかと云えば、それは常にその地紙や、墨色や、裱具の裂きれが持つている古色にあるのだ。その古色がその床の間や座敷の暗さと適宜な釣り合いを保つのだ。われ／＼はよく京都や奈良の名刹を訪ねて、その寺の宝物と云われる軸物が、奥深い大書院の床の間にかゝっているのを見せられるが、そう云う床の間は大概昼も薄暗いので、図柄などは見分けられない、たゞ案内人の説明を聞きながら消えかゝった墨色のあとを辿って多分立派な絵なのであろうと想像するばかりであるが、しかしそのぼやけた古画と暗い床の間との取り合わせが如何にもしっくりしていて、図柄の不鮮明などは聊かも問題でないばかりか、却ってこのくらい不鮮明

さがちようど適しているようにさえ感じる。つまりこの場合、その絵は覚束ない弱い光りを受け留めるための一つの奥床しい「面」に過ぎないのであつて、全く砂壁と同じ作用をしかしていないのである。われらが掛け軸を扱ふのに時代や「さび」を珍重する理由はここにあるので、新画は水墨や淡彩のものでも、よほど注意しないと床の間の陰翳を打ち壊すのである。



もし日本座敷を一つの墨絵に喩えるなら、障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。私は、数寄を凝ら

した日本座敷の床の間を見る毎に、いかに日本人が陰翳の秘密を理解し、光りと蔭との使い分けに巧妙であるかに感嘆する。なぜなら、そこにはこれと云う特別なしつらえがあるのではない。要するにたゞ清楚な木材と清楚な壁とを以て一つの凹んだ空間を仕切り、そこへ引き入れられた光線が凹みの此処彼処へ朦朧もうろうたるくま隈を生むようにする。にも拘らず、われらは落懸おとしがけのうしろや、花活の周囲や、違い棚の下などを填うめて、それを、それでもない蔭であることを知りながらも、その空気だけがシーンと沈み切っているような、永劫不変の閑寂がその暗がりを通して、いるような感銘を受ける。思うに西洋人の云う「東洋の神秘」とは、かくの如き暗がりを持つ無気味な静かさを指すのであろう。

われらといえども少年の頃は、日の目の届かぬ茶の間や書院の床の間の奥を視つめると、云い知れぬ怖れと寒けを覚えたものである。しかもその神秘の鍵は何処にあるのか。種明かしをすれば、畢竟それは陰翳の魔法であつて、もし隅々に作られている蔭を追い除けてしまつたら、忽焉としてその床の間はたゞの空白に歸するのである。われらの祖先の天才は、虚無の空間を任意に遮蔽して自ら生ずる陰翳の世界に、いかなる壁画や装飾にも優る幽玄味おのずかを持たせたのである。これは簡単な技巧のようであつて、実は中々容易でない。たとえば床脇の窓のく割り方、落懸の深さ、床框の高さなど、一つ／＼に眼に見えぬ苦心が払われていることは推察するに難くないが、分けても私は、書院の障子のしろ／＼とし

たほの明るさには、ついその前に立ち止まって時の移るのを忘れるのである。元来書院と云うものは、昔はその名の示す如く彼処で書見をするためにあゝ云う窓を設けたのが、いつしか床の間の明り取りとなつたのであろうが、多くの場合、それは明り取りと云うよりも、むしろ側面から射して来る外光を一旦障子の紙で濾過して、適当に弱める働きをしている。まことにあの障子の裏に照り映えている逆光線の明りは、何と云う寒々とした、わびしい色をしていることか。庇をくゞり、廊下を通つて、よう／＼そこまで辿り着いた庭の陽光は、もはや物を照らし出す力もなくなり、血の気も失せてしまったかのように、たゞ障子の紙の色を白々と際立たせているに過ぎない。私はしば／＼あの障子の前に

佇たたずんで、明るいけれども少しも眩まばゆさの感じられない紙の面を視つめるのであるが、大きな伽藍建築の座敷などでは、庭との距離が遠いためにいよ／＼光線が薄められて、春夏秋冬、晴れた日も曇った日も、朝も、昼も、夕も、殆どそのほのじろさに変化がない。そして縦たてしげ繁の障子の棧の一とコマ毎に出来ている隈くまが、あたかも塵が溜まったように、永久に紙に沁み着いて動かないのかと訝あやしまれる。そう云う時、私はその夢のような明るさをいぶかりながら眼をしばだ／＼。何か眼の前にもや／＼とかげろうものがあつて、視力を鈍らせているように感ずる。それはそのほのじろい紙の反射が、床の間の濃い闇を追い払うには力が足らず、却つて闇に弾ね返されながら、明暗の区別のつかぬ昏迷の世界を現

じつゝあるからである。諸君はそう云う座敷へ這入った時に、その部屋にたゞようている光線が普通の光線とは違うような、それが特に有難味のある重々しいもののような気持がしたことはないであろうか。或はまた、その部屋にいと時間の経過が分らなくなつてしまい、知らぬ間に年月が流れて、出て来た時は白髪の老人になりはせぬかと云うような、「悠久」に対する一種の怖れを抱いたことはないであろうか。



諸君はまたそう云う大きな建物の、奥の奥の部屋へ行くと、も

う全く外の光りが届かなくなつた暗がりの中にある金襖や金屏風が、幾間を隔てた遠い／＼庭の明りの穂先を捉えて、ぽうつと夢のように照り返しているのを見たことはないか。その照り返しは、夕暮れの地平線のように、あたりの闇へ実に弱々しい金色の明りを投じているのであるが、私は黄金と云うものがあれほど沈痛な美しさを見せる時はないと思う。そして、その前を通り過ぎながら幾度も振り返つて見直すことがあるが、正面から側面の方へ歩を移すに随つて、金地の紙の表面がゆつくりと大きく底光りする。決してちら／＼と忙がしい瞬きをせず、巨人が顔色を変えるように、きらりと、長い間を置いて光る。時とすると、たつた今まで眠つたような鈍い反射をしていた梨地の金が、側面へ廻ると、



燃え上るように耀やいているのを発見して、こんなに暗い所でどうしてこれだけの光線を集めることが出来たのかと、不思議に思う。それで私には昔の人が黄金を佛の像に塗ったり、貴人の起居する部屋の四壁へ張ったりした意味が、始めて領けるのである。現代の人は明るい家に住んでいるので、こう云う黄金の美しさを知らない。が、暗い家に住んでいた昔の人は、その美しい色に魅せられたばかりでなく、かねて実用的価値をも知っていたのであろう。なぜなら光線の乏しい屋内では、あれがレフレクターの役目をしたに違いないから。つまり彼等はたゞ贅沢に黄金の箔や砂子を使ったのではなく、あれの反射を利用して明りを補ったのであろう。そうだとすると、銀やその他の金属はじきに光沢が褪<sup>あ</sup>せ

てしまうのに、長く耀やきを失わないで室内の闇を照らす黄金と云うものが、異様に貴ばれたであろう理由を会得することが出来る。私は前に、蒔絵と云うものは暗い所で見て貰うように作られていることを云ったが、こうしてみると、ただ啻に蒔絵ばかりではない、織物などでも昔のものに金銀の糸がふんだんに使つてあるのは、同じ理由に基づくことが知れる。僧侶が纏う金襴けさの袈裟などは、その最もいゝ例ではないか。今日町中まちなかにある多くの寺院は大概本堂を大衆向きに明るくしてあるから、あゝ云う場所では徒らにケバケバしいばかりで、どんな人柄な高僧が着ていても有難味を感じることはめつたにないが、由緒あるお寺の古式に則つた佛事に列席してみると、しわ皺だらけな老僧の皮膚と、佛前の燈明の

明滅と、あの金欄の地質とが、いかによく調和し、いかに荘嚴味を増しているかが分るのであつて、それと云うのも、蒔絵の場合と同じように、派手な織り模様的大部分を闇が隠してしまい、たゞ金銀の糸がとき／＼、少しずつ光るようになるからである。それから、これは私一人だけの感じであるかも知れないが、およそ日本人の皮膚に能衣裳ほど映りのいゝものはないと思う。云うまでもなくあの衣裳には随分絢爛なものが多く、金銀が豊富に使つてあり、しかもそれを着て出る能役者は、歌舞伎俳優のようにお白粉を塗つてはいないのであるが、日本人特有の赧あかみがかつた褐色の肌、或は黄色味をふくんだ象牙色の地顔があんなに魅力を發揮する時はないのであつて、私はいつも能を見に行く度毎に感心す

る。金銀の織り出しや刺繍のある桂うちきの類もよく似合うが、濃い緑色や柿色の素襖、水干、狩衣の類、白無地の小袖、大口等も実によく似合う。たま／＼それが美少年の能役者だと、肌理きめのこまかい、若々しい照りを持った頬の色つやなどがそのためにひとしお引き立てられて、女の肌とは自ら違つた蠱惑こわくを含んでいようように見え、なるほど昔の大名が寵童の容色に溺れたと云うのは此処のことだなど、合点が行く。歌舞伎の方でも時代物や所作事の衣裳の華美なことは能楽のそれに劣らないし、性的魅力の点にかけてはこの方が遙かに能楽以上とされているけれども、両方をたび／＼見馴れて来ると、事實はそれの反対であることに気が付くであらう。ちよつと見た時は歌舞伎の方がエロティックでもあり、綺

麗でもあるのに論はないが、昔はとにかく、西洋流の照明を使うようになった今日の舞台では、あの派手な色彩がやゝともすると俗悪に陥り、見飽きがする。衣裳もそうなら、化粧とてもそうであつて、仮に美しいとしてからが、それが何処までも作つた顔であつてみれば、生地的美しさのような実感が伴わない。然るに能楽の俳優は、顔も、襟も、手も、生地のみゝで登場する。されば眉目のなまめかしさはその人本来のものであつて、毫もわれくの眼を欺いているのではない。故に能役者の場合は女形や二枚目の素顔に接してお座がさめたと云うようなことは有り得ない。たゞわれくの感じることは、われくと同じ色の皮膚を持った彼等が一見似合いそうにもない武家時代の派手な衣裳を着けた時に如

何にその容色が水際立つて見えるかと云う一事である。かつて私は、「皇帝」の能で楊貴妃に扮した金剛巖氏を見たことがあったが、袖口から覗いているその手の美しかったことを今も忘れない。私は彼の手を見ながら、しばし膝の上に置いた自分の手を省みた。そして彼の手がそんなにも美しく見えるのは、手頸から指先に至る微妙な掌てのひらの動かし方、独特の技巧を罩こめた指のさばきにも因るのであるが、それにしても、その皮膚の色の、内部からぼうつと明りが射しているような光沢は、何処から来るのかと訝しみに打たれた。何となれば、それは何処までも普通の日本人の手であつて、現に私が膝の上についている手と、肌の色つやに何の違つたところもない。私は再び三たび舞台の上の金剛氏の手と自

分の手とを見較べたが、いくら見較べても同じ手である。だが不思議にも、その同じ手が舞台にあつては妖しいまでに美しく見え、自分の膝の上にあつては只の平凡な手に見える。かくの如きことはひとり金剛巖氏の場合のみではない。能においては、衣裳の外へ露あらわれる肉体はほんの僅かな部分であつて、顔と、襟くびと、手頸から指の先までに過ぎず、楊貴妃のように面を附けている時は顔さえ隠れてしまうのであるが、それでいてその僅かな部分の色つやが異様に印象的になる。金剛氏は特にそうであつたけれども、大概の役者の手が、何の奇もない当りまえの日本人の手が、現代の服装をしては気が付かれない魅惑を發揮してわれ／＼に驚異の眼を見張らせる。繰り返して云うが、それは決して美少

年や美男子の役者に限るのではない。たとえば、日常われ／＼は普通の男子の唇に惹き付けられることなどは有り得ないが、能の舞台では、あの黝くろずんだ赤みと、しめり気を持った肌が、口紅をさした婦人のそれ以上に肉感的なねばっこさを帯びる。これは役者が謡いをうたうために始終唇を唾液で濡らす故でもあろうが、しかしそのせいばかりとは思えない。また子方の俳優の頬が紅潮を呈しているのが、その赤さが、実に鮮やかに引き立って見える。私の経験では緑系統の地色の衣裳を着けた時に最も多くそう見えるので、色の白い子方なら勿論であるが、実を云うと色の黒い子方の方が、却ってその赤味の特色が眼立つ。それはなぜかと云うと、色白な児では白と赤との対照があまり刻明である結果、能衣



裳の暗く沈んだ色調には少し効果が強過ぎるが、色の黒い兎の暗褐色の頬であると、赤がそれほど際立たないで、衣裳と顔とが互に照りはえる。渋い緑と、渋い茶と、二つの間色が映り合つて、黄色人種の肌がいかにもその所を得、今更のように人目を惹く。私は色の調和が作り出すかくの如き美が他にあるを知らないが、もし能楽が歌舞伎のように近代の照明を用いたとしたら、それらの美感は悉くどぎつい光線のために飛び散つてしまふであろう。さればその舞台を昔ながらの暗さに任してあるのは、必然の約束に従っている訳であつて、建物なども古ければ古い程いゝ。床が自然のつやを帯びて柱や鏡板などが黒光りに光り、梁から軒先の闇が大きな吊り鐘を伏せたように役者の頭上へ蔽いかぶさつてい

る舞台、そういう場所が最も適しているのであって、その点から云えば近頃能楽が朝日会館や公会堂へ進出するのは、結構なことに違いないけれども、そのほんとうの持ち味は半分以上失われていると思われる。



ところで、能に付き纏うそう云う暗さと、そこから生ずる美しさとは、今日でこそ舞台の上でしか見られない特殊な陰翳の世界であるが、昔はあれがさほど実生活とかけ離れたものではなかったであろう。何となれば、能舞台における暗さは即ち当時の住宅

建築の暗さであり、また能衣裳の柄や色合は、多少実際より花やかであつたとしても、大体において当時の貴族や大名の着ていたものと同じであつたらうから。私は一とたびそのことに考え及ぶと、昔の日本人が、殊に戦国や桃山時代の豪華な服装をした武士などが、今日のわれ／＼に比べてどんなに美しく見えたであらうかと想像して、たゞその思いに恍惚となるのである。まことに能は、われ／＼同胞の男性の美を最高潮の形において示しているのだ、その昔戦場往来の古武士が、風雨に曝された、顴骨の飛び出た、真つ黒な赭顔にあゝ云う地色や光沢の素襖や大紋かみしもや袴かみしもを着けていた姿は、いかに凜々しくも厳かであつただらうか。けだし能を見て楽しむ人は、皆いくらかずつかくの如き連想に浸ることを

楽しむのであつて、舞台上の色彩の世界がかつてはその通りに  
実在していたと思うところに、演技以外の懐古趣味がある。これ  
に反して歌舞伎の舞台は何処までも虚偽の世界であつて、われ／＼  
の生地の美しさとは関係がない。男性美は云うまでもないが、  
女性美とても、昔の女が今のあの舞台で見るようなものであつた  
ろうとは考えられない。能楽においても女の役は面を附けるので  
実際には遠いものであるが、さればとて歌舞伎劇の女形を見ても  
実感は湧かない。これは偏えに歌舞伎の舞台が明る過ぎるせいで  
あつて、近代的照明の設備のなかつた時代、蠟燭やカンテラで纒わざ  
かに照らしていた時代の歌舞伎劇は、その時分の女形は、或はも  
う少し実際に近かつたのではないであらうか。それにつけても、

近代の歌舞伎劇に昔のような女らしい女形が現れないと云われるのは、必ずしも俳優の素質や容貌のためではあるまい。昔の女形でも今日のような明煌々たる舞台に立たせれば、男性的なトゲトゲしい線が眼立つに違いないのが、昔は暗さがそれを適当に蔽い隠してくれたのではないか。私は晩年の梅幸のお軽を見て、このことを痛切に感じた。そして歌舞伎劇の美を亡ぼすものは、無用に過剰なる照明にあると思った。大阪の通人に聞いた話に、文楽の人形浄瑠璃では明治になってからも久しくランプを使っていたものだが、その時分の方が今より遙かに餘情に富んでいたと云う。私は現在でも歌舞伎の女形よりはあの人形の方に餘計実感を覚えるのであるが、なるほどあれが薄暗いランプで照らされていたな

らば、人形に特有な固い線も消え、てらくした胡粉のつやもぼかされて、どんなにか柔かみがあつたであらうと、その頃の舞台の凄いやうな美しさを空想して、そゞろに寒気を催すのである。



知つての通り文楽の芝居では、女の人形は顔と手の先だけしかない。胴や足の先は裾の長い衣裳の裡に包まれているので、人形使いが自分達の手を内部に入れて動きを示せば足りるのであるが、私はこれが最も実際に近いのであつて、昔の女と云うものは襟から上と袖口から先だけの存在であり、他は悉く闇に隠れていたも

のだと思う。当時にあつては、中流階級以上の女はめつたに外出することもなく、しても乗物の奥深く潜んで街頭に姿を曝さないようにしていたとすれば、大概はあの暗い家屋敷の一と間に垂れ籠めて、昼も夜も、たゞ闇の中に五体を埋めつゝその顔だけで存在を示していたと云える。されば衣裳なども、男の方が現代に比べて派手な割合に、女の方はそれほどでない。舊幕時代の町家の娘や女房のものなどは驚くほど地味であるが、それは要するに、衣裳と云うものは闇の一部分、闇と顔とのつながりに過ぎなかつたからである。鉄漿おはぐろなどと云う化粧法が行われたのも、その目的を考えると、顔以外の空隙へ悉く闇を詰めてしまおうとして、口腔へまで暗黒を啣ませたのではないであらうか。今日かくの如

き婦人の美は、島原の角屋のような特殊な所へ行かない限り、実際には見ることが出来ない。しかし私は幼い時分、日本橋の家の奥でかすかな庭の明りをたよりに針仕事をしていた母の倅を考えると、昔の女がどう云う風なものであつたか、少しは想像出来るのである。あの時分、と云うのは明治二十年代のことだが、あの頃までは東京の町家も皆薄暗い建て方で、私の母や伯母や親戚の誰彼など、あの年配の女達は大概鉄漿を付けていた。着物は不斷着は覚えていないが、餘所よそ行きの時は鼠地の細かい小紋をしば／＼着た。母は至つてせいが低く、五尺に足らぬほどであつたが、母ばかりでなくあの頃の女はそのくらいが普通だつたのであろう。いや、極端に云えば、彼女たちには殆ど肉体がなかつたのだと云



つていゝ。私は母の顔と手の外、足だけはぼんやり覚えているが、胴体については記憶がない。それで想い起すのは、あの中宮寺の観世音の胴体であるが、あれこそ昔の日本の女の典型的な裸体像ではないのか。あの、紙のように薄い乳房の附いた、板のような平べったい胸、その胸よりも一層小さくくびれている腹、何の凹お凸うとつもない、真つ直ぐな背筋と腰と臀の線、そう云う胴の全体が顔や手足に比べると不釣合に痩せ細っていて、厚みがなく、肉体と云うよりもずんどうの棒のような感じがするが、昔の女の胴体は押しなべてあゝ云う風ではなかったのであろうか。今日でもあゝ云う恰好の胴体を持った女が、舊弊な家庭の老夫人とか、藝者などの中に時々いる。そして私はあれを見ると、人形の心棒を思い

出すのである。事実、あの胴体は衣裳を着けるための棒であつて、それ以外の何物でもない。胴体のスタッフを成しているものは、幾襲ねとなく巻き附いている衣と綿とであつて、衣裳を剥げば人形と同じように不恰好な心棒が残る。が、昔はあれでよかつたのだ、闇の中に住む彼女たちに取つては、ほのじろい顔一つあれば、胴体は必要がなかつたのだ。思うに明朗な近代女性の肉体美を謳歌する者には、そう云う女の幽鬼じみた美しさを考えることは困難であろう。また或る者は、暗い光線で胡麻化した美しさは、真の美しさでないと云うであろう。けれども前にも述べたように、われ／＼東洋人は何でもない所に陰翳を生ぜしめて、美を創造するのである。「搔き寄せて結べば柴の庵なり解くればもとの野原

なりけり」と云う古歌があるが、われ／＼の思索のしかたはとかくそう云う風であつて、美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考える。夜光の珠も暗中に置けば光彩を放つが、白日の下に曝せば宝石の魅力を失う如く、陰翳の作用を離れて美はないと思う。つまりわれ／＼の祖先は、女と云うものを蔘まきえ絵や螺鈿らでんの器と同じく、闇とは切つても切れな  
いものとして、出来るだけ全体を蔭へ沈めてしまふようにし、長い袂や長い裳裾で手足を隈の中に包み、或る一箇所、首だけの際立たせるようにしたのである。なるほど、あの均斉を缺いた平べったい胴体は、西洋婦人のそれに比べれば醜いであろう。しかしわれ／＼は見えないものを考えるには及ばぬ。見えないものは無

いものであるとする。強しいてその醜みにくさを見ようとする者は、茶室の床の間へ百燭光の電燈を向けるのと同じく、そこにある美みを自みずから追い遣やつてしまうのである。



だが、いったいこう云う風に暗がりの中に美を求める傾向が、東洋人にのみ強いのは何故であろうか。西洋にも電気や瓦斯ガスや石油のなかつた時代があつたのであろうが、寡聞な私は、彼等に蔭を喜ぶ性癖があることを知らない。昔から日本のお化けは脚がないが、西洋のお化けは脚がある代りに全身が透きとおっていると

云う。そんな些細な一事でも分るように、われ／＼の空想には常に漆黒の闇があるが、彼等は幽霊をさえガラスのように明るくする。その他日用のあらゆる工藝品において、われ／＼の好む色が闇の堆積したものなら、彼等の好むのは太陽光線の重なり合った色である。銀器や銅器でも、われらは錆の生ずるのを愛するが、彼等はそう云うものを不潔であり非衛生的であるとして、ピカピカに研き立てる。部屋の中もなるべく隈を作らないように、天井や周囲の壁を白くぼくする。庭を造るにも我等が木深い植え込みを設ければ、彼等は平らな芝生をひろげる。かくの如き嗜好の相違は何に依つて生じたのであろうか。案ずるにわれ／＼東洋人は己れの置かれた境遇の中に満足を求め、現状に甘んじようとする

風があるので、暗いと云うことに不平を感じず、それは仕方のないものとあきらめてしまい、光線が乏しいなら乏しいなりに、却つてその闇に沈潜し、その中に自らなる美をおのずか発見する。然るに進取的な西洋人は、常により良き状態を願つて已まやない。蠟燭からランプに、ランプから瓦斯燈に、瓦斯燈から電燈にと、絶えず明るさを求めて行き、僅かな蔭をも払い除けようと苦心をする。恐らくそう云う氣質の相違もあるのであろうが、しかし私は、皮膚の色の違いと云うことも考えてみたい。われ／＼とても昔から肌が黒いよりは白い方を貴いとし、美しいともしたことだけれども、それでも白皙人種の白さとわれ／＼の白さとは何処か違う。一人一人に接近して見れば、西洋人より白い日本人があり、日本人よ

り黒い西洋人があるようだけれども、その白さや黒さの工合が違  
う。これは私の経験から云うのであるが、以前横浜の山手に住ん  
でいて、日夕居留地の外人等と行楽を共にし、彼等の出入する宴  
会場や舞蹈場へ遊びに行っていた時分、傍で見ると彼等の白さを  
そう白いとは感じなかつたが、遠くから見ると、彼等と日本人と  
の差別が、実にはつきり分るのであつた。日本人でも彼等に劣ら  
ない夜会服を著<sup>つ</sup>け、彼等より白い皮膚を持ったレディーがいるが、  
しかしそう云う婦人が一人でも彼等の中に交ると、遠くから見渡  
した時にすぐ見分けがつく。と云うのは、日本人のはどんなに白  
くとも、白い中に微かな翳<sup>かげ</sup>りがある。そのくせそう云う女たちは  
西洋人に負けないように、背中から二の腕から腋の下まで、露出

している肉体のあらゆる部分へ濃い白粉を塗っているのだが、それでいて、やっぱりその皮膚の底に澱んでいる暗色を消すことが出来ない。ちようど清冽な水の底にある汚物が、高い所から見下ろすとよく分るように、それが分る。殊に指の股だとか、小鼻の周囲だとか、襟頸だとか、背筋だとかに、どす黒い、埃の溜ったような隈が出来る。ところが西洋人の方は、表面が濁っているようでも底が明るく透きとおっていて、体じゅうの何処にもそう云う薄汚い蔭がささない。頭の前から指の先まで、交り気がなく冴え／＼と白い。だから彼等の集会の中へわれ／＼の一人が這入り込むと、白紙に一点薄墨のしみが出来たようで、われ／＼が見てもその一人が眼障りのように思われ、あまりいゝ気持がしない



のである。こうしてみると、かつて白哲人種が有色人種を排斥した心理が頷けるのであって、白人中でも神経質な人間には、社交場裡に出来る一点のしみ、一人か二人の有色人さえが、気にならずにはいかなかったのであろう。そう云えば、今日ではどうか知らないが、昔黒人に対する迫害が最も激しかった南北戦争の時代には、彼等の憎しみと蔑みは単に黒人のみならず、黒人と白人との混血児、混血児同士の混血児、混血児と白人との混血児等々にまで及んだと云う。彼等は二分の一混血児、四分の一混血児、八分の一、十六分の一、三十二分の一混血児と云う風に、僅かな黒人の血の痕跡を何処までも追究して迫害しなければ已まなかった。一見純粹の白人と異なるところのない、二代も三代も前の先祖に

一人の黒人を有するに過ぎない混血児に対しても、彼等の執拗な眼は、ほんの少しばかりの色素がその真つ白な肌の中に潜んでい  
るのを見逃さなかつた。で、かくの如きことを考えるにつけても、  
いかにわれ／＼黄色人種が陰翳と云うものと深い関係にあるかが  
知れる。誰しも好んで自分たちを醜悪な状態に置きたがらないも  
のである以上、われ／＼が衣食住の用品に曇つた色の物を使い、  
暗い雰囲気の中に自分たちを沈めようとするのは当然であつて、  
われ／＼の先祖は彼等の皮膚に翳りがあることを自覚していた訳  
でもなく、彼等より白い人種が存在することを知っていたのでは  
ないけれども、色に対する彼等の感覚が自然とあゝ云う嗜好を生  
んだものと見る外はない。



われ／＼の先祖は、明るい大地の上下四方を仕切つてまず陰翳の世界を作り、その闇の奥に女人を籠らせて、それをこの世で一番色の白い人間と思ひ込んでいたのであろう。肌の白さが最高の女性美に缺くべからざる条件であるなら、われ／＼としてはそうするより仕方がないのだし、それで差支えない訳である。白人の髪が明色であるのにわれ／＼の髪が暗色であるのは、自然がわれ／＼に闇の理法を教えているのだが、古人は無意識のうちに、その理法に従つて黄色い顔を白く浮き立たせた。私はさつき鉄漿おはぐろ

のことを書いたが、昔の女が眉毛を剃り落したのも、やはり顔を際立たせる手段ではなかったのか。そして私が何よりも感心するのは、あの玉虫色に光る青い口紅である。もう今日では祇園の藝妓などでさえ殆どあれを使わなくなつたが、あの紅こそはほのぐらい蠟燭のはためきを想像しなければ、その魅力を解し得ない。古人は女の紅い唇をわざと青黒く塗りつぶして、それに螺鈿を鏤ちりばめたのだ。豊艷な顔から一切の血の気を奪つたのだ。私は、蘭燈のゆらめく蔭で若い女があゝの鬼火のような青い唇の間からとき／＼黒漆色の歯を光らせてほゝ笑んでいるさまを思うと、それ以上の白い顔を考えることが出来ない。少くとも私が脳裡に描く幻影の世界では、どんな白人の女の白さよりも白い。白人の白さは、

透明な、分り切った、有りふれた白さだが、それは一種人間離れのした白さだ。或はそう云う白さは、実際には存在しないかも知れない。それはたゞ光りと闇が醸し出す悪戯であつて、その場限りのものかも知れない。だがわれ／＼はそれでいゝ。それ以上を望むには及ばぬ。こゝで私は、そう云う顔の白さを想う半面に、それを取り囲む闇の色について話したいのだが、もう数年前、いつぞや東京の客を案内して島原の角屋で遊んだ折に、一度忘れられない或る闇を見た覚えがある。何でもそれは、後に火事で焼けた失せた「松の間」とか云う広い座敷であつたが、僅かな燭台の灯で照らされた廣間の暗さは、小座敷の暗さと濃さが違う。ちやうど私がその部屋へ這入つて行つた時、眉を落して鉄漿を付けてい

る年増の仲居が、大きな衝立の前に燭台を据えて畏まつていたが、  
畳二畳ばかりの明るい世界を限っているその衝立の後方には、天  
井から落ちかゝりそうな、高い、濃い、たゞ一と色の闇が垂れて  
いて、覚束ない蠟燭の灯がその厚みを穿つことが出来ずに、黒い  
壁に行き当つたように撥ね返されているのであつた。諸君はこう  
云う「灯に照らされた闇」の色を見たことがあるか。それは夜道  
の闇などとは何処か違つた物質であつて、たとえば一と粒一と粒  
が虹色のかゞやきを持った、細かい灰に似た微粒子が充満してい  
るもののように見えた。私はそれが眼の中へ這入り込みはしない  
かと思つて、覚えぬ眼瞼をしばだゝいた。今日では一般に座敷の  
面積を狭くすることが流行り、十畳八畳六畳と云うような小間を

建てるので、仮に蠟燭を点じてもかゝる闇の色は見られないが、昔の御殿や妓楼などでは、天井を高く、廊下を廣く取り、何十畳敷きと云う大きな部屋を仕切るのが普通であつたとすると、その屋内にはいつもここう云う闇が狭霧の如く立ち罩こめていたのである。そしてやんごとない上臈たちは、その闇の灰汁あくにどっぷり漬かつていたのである。かつて私は「倚松庵隨筆」の中でもそのことを書いたが、現代の人は久しく電燈の明りに馴れて、ここう云う闇のあつたことを忘れていたのである。分けても屋内の「眼に見える闇」は、何かチラチラとかげろうものがあるような気がして、幻覚を起し易いので、或る場合には屋外の闇よりも凄味がある。魑魅ちみとか妖怪変化とかの跳躍するのはけだしここう云う闇であ

ろうが、その中に深い帳とぼりを垂れ、屏風や襖を幾重にも囲って住んでいた女と云うのも、やはりその魑魅の眷属けんぞくではなかつたか。闇は定めしその女達を十重二十重に取り巻いて、襟や、袖口や、裾の合わせ目や、至るところの空隙を填めていたであらう。いや、事に依ると、逆に彼女達の体から、その齒を染めた口の中や黒髪の先から、土蜘蛛つちぐもの吐く蜘蛛のいの如く吐き出されていたのかも知れない。

○

先年、武林無想庵が巴里パリから帰って来ての話に、歐洲の都市に



比べると東京や大阪の夜は格段に明るい。巴里などではシャンゼリゼエの真ん中でもランプを燈す家があるのに、日本ではよほど辺鄙な山奥へでも行かなければそんな家は一軒もない。恐らく世界じゅうで電燈を贅沢に使っている国は、アメリカ亜米利加と日本である。日本は何でも亜米利加の真似をしたがる国だと云うことであった。無想庵の話は今から四五年も前、まだネオンサインなどの流行り出さない頃であったから、今度彼が帰つて来たらいよいよはや明るくなっているのにさぞかし吃びっくり驚するであろう。それからこれは「改造」の山本社長に聞いた話だが、かつて社長がアインシュタイン博士を上方へ案内する途中汽車で石山のあたりを通ると、窓外の景色を眺めていた博士が、「あゝ、彼処に大層不経済なも

のがある」と云うので訳を聞くと、そこらの電信柱か何かに白昼電燈のともっているのを指さしたと云う。「アインシュタインは猶<sup>ユダヤ</sup>太人ですからそう云うことが細かいんでしようね」と、山本氏は注釈を入れたが、亜米利加はとにかく、歐洲に比べると日本の方が電燈を惜し気もなく使っていることは事実であるらしい。石山と云えばもう一つおかしなことがあるのだが、今年の秋の月見に何処がよかろう此処がよかろうと首をひねった揚句、結局石山寺へ出かけることに極めていると、十五夜の前日の新聞に石山寺では明晩観月の客の興を添えるため林間に拡声器を取り付け、ムーンライトソナタのレコードを聴かせると云う記事が出ている。私はそれを読んで急に石山行きを止めてしまった。拡声器も困り

物だが、そう云う風ではきつとあの山の方々に電燈やイルミネーションを飾り、賑々しく景気を付けてはいないかと思つたからである。前にも私はそれで月見をフイにした覚えがあるのは、或る年の十五夜に須磨寺の池へ舟を浮かべてみようと思ひ、同勢を集め重詰めを持ち寄つて繰り出してみると、あの池のぐるりを五色の電飾が花やかに取り巻いていて、月はあれどもなきが如くなのであつた。それやこれやを考えると、どうも近頃のわれ／＼は電燈に麻痺して、照明の過剰から起る不便と云うことに対しては案外無感覺になつてゐるらしい。お月見の場合なんかはまあ執方でもいゝけれども、待合、料理屋、旅館、ホテルなどが、一体に電燈を浪費し過ぎる。それも客寄せのために幾らか必要であらうけ

れども、夏など、まだ明るいうちから点燈するのは無駄である以上、上に暑くもある。私は夏は何処へ行つてもこれで弱らせられる。外が涼しいのに座敷の中が馬鹿に暑いのは、殆ど十が十まで電力が強過ぎるか電球が多過ぎるかのせいであつて、試しに一部分を消してみると俄かにすうつとするのだが、客も主人も一向それに気が付かないのが不思議でならない。元来室内の燈し火は、冬は幾らか明るくし、夏は幾らか暗くすべきである。その方が冷涼の気を催すし、第一虫が飛んで来ない。然るに餘計に電燈をつけ、それで暑いからと云つて煽風器を廻すのは、考えただけでも煩わしい。尤も日本座敷だと熱が傍から散つて行くのでまだ我慢が出来るけれども、ホテルの洋室では風通しが悪い上に、床、壁、天

井等が熱を吸い取って四方から反射するので、実にたまらない。例を挙げるのは少し気の毒だが、京都の都ホテルのロビーへ夏の晩に行つたことのある人は、私のこの説に同感してくれないであろうか。彼処は北向きの高台に拠つていて、比叡山や如意ヶ嶽や黒谷の塔や森や東山一帯の翠巒すいらんを一眸のうちに集め、見るからすがくしい気持のする眺めであるが、それだけになお惜しい。夏のゆうがた、折角山紫水明に對して爽快の氣分に浸ろうと思ひ、楼に満つる涼風を慕つて出かけてみると、白い天井の此処彼処に大きな乳白ガラスの蓋ふたが箆はめ込んであつて、ドギツイ明りが中であつくと燃えている。それが、近頃の洋館は天井が低いので、すぐ頭の上に火の玉がくるめいているようで、暑いことと云つた

らない、体のうちでも天井に近い所ほど暑く、頭から襟頸から背筋へかけて炙あぶられるように感じる。しかもその火の玉が一つあつたらあれだけの廣さを照らすには十分なくらいであるのに、そう云う奴が三つも四つも天井に光っていて、その外にも小さな奴が壁に沿い柱に沿うて幾つとなく取り附けてあるのだが、そんなのはたゞ隅々に出来る隈を消している以外に、何の役にも立っていない。だから室内に蔭と云うものが一つもなく、見渡したところ、白い壁と、赤い太い柱と、派手な色をモザイクのように組み合わせた床が、刷りたての石版画のように眼に沁み込んで、これがまた相当に暑苦しい。廊下からそこへ這入つて来ると、温度の違いが際立って分る。あれではたとい涼しい夜気が流れ込んで来て、

すぐ熱い風に変つてしまふから何にもなるまい。彼処は以前たび／＼泊まりに行つたことのあるホテルで、なつかしく思うところから親切気で忠告するのだが、實際あゝ云う形勝な眺望、最適な夏の涼み場所を、電燈で打ち壊しているのはもつたない。日本人には勿論のこと、いくら西洋人が明るみを好むからと云つて、あの暑さには閉口するに違いなからうが、何より彼より、一遍明りを減らしてみたらてきめん觀面に諒解するであらう。だがこれなどは一例を挙げたまでであつて、あのホテルに限つたことではない。間接照明を使つている帝国ホテルだけはまず無難だが、夏はあれをもう少し暗くしてもよかりそうに思う。何にしても今日の室内の照明は、書を読むとか、字を書くとか、針を運ぶとか云うこと

は最早<sup>もはや</sup>問題でなく、専ら四隅の蔭を消すことに費されるようになったが、その考は少くとも日本家屋の美の觀念とは両立しない。個人の住宅では経済の上から電力を節約するので、却って巧く行っているけれども、客商売の家になると、廊下、階段、玄関、庭園、表門等に、どうしても明りが多過ぎる結果になり、座敷や泉石の底を浅くしてしまっている。冬はその方が暖かで助かることもあるが、夏の晩はどんな幽邃<sup>ゆうすい</sup>な避暑地へ逃れても、先が旅館である限り大概都ホテルと同じような悲哀に打<sup>ぶ</sup>つかる。だから私は、自分の家で四方の雨戸を開け放つて、真つ暗な中に蚊帳を吊つてころがっているのが涼を納<sup>い</sup>れる最上の法だと心得ている。





この間何かの雑誌か新聞で英吉利イギリスのお婆さんたちが愚痴をこぼしている記事を読んだら、自分たちが若い時分には年寄りを大切にしていた労わってやったのに、今の娘たちは一向われ／＼を構ってくれない、老人と云うと薄汚いもののように思つて傍へも寄りつかない、昔と今とは若い者の氣風が大變違つたと歎いているので、何処の国でも老人は同じようなことを云うものだと思ひしたが、人間は年を取るに従い、何事に依らず今よりは昔の方がよかつたと思ひ込むものであるらしい。で、百年前の老人は二百年前の時代を慕い、二百年前の老人は三百年前の時代を慕い、いつの時代

にも現状に満足することはない訳だが、別して最近では文化の歩みが急激である上に、我が国はまた特殊な事情があるので、維新以来の変遷はそれ以前の三百年五百年にも当るであろう。などという私が、やはり老人の口真似をする年配になつたのがおかしいが、しかし現代の文化設備が専ら若い者に媚びてだん／＼老人に不親切な時代を作りつゝあることは確かなように思われる。早い話が、街頭の十字路を号令で横切るようになっては、もう老人は安心して町へ出ることが出来ない。自動車で乗り廻せる身分の者はいゝけれども、私などでも、たまに大阪へ出ると、此方側から向う側へ渡るのに渾身の神経を緊張させる。ゴーストツプの信号にしてからが、辻の真ん中にあるのは見よいが、思いがけない横つちよ

の空に青や赤の電燈が明滅するのは、中々に見つけ出しにくいし、  
廣い辻だと、側面の信号を正面の信号と間違えたりする。京都に  
交通巡査が立つようになってはもうおしまいだとつく／＼そう  
思ったことがあったが、今日純日本風の町の情趣は、西宮、堺、  
和歌山、福山、あの程度の都市へ行かなければ味わわれない。食  
べる物でも、大都會では老人の口に合うようなものを捜し出すの  
に骨が折れる。先だっても新聞記者が来て何か変った旨い料理の  
話をしろと云うから、吉野の山間僻地の人が食べる柿の葉鮎と云  
うものの製法を語った。ついでにこゝで披露しておくが、米一升  
に付酒一合の割りで飯を焚く。酒は釜が噴いて来た時に入れる。  
さて飯がムレたら完全に冷えるまで冷ました後に手に塩をつけて

固く握る。この際手に少しでも水気があつてはいけない。塩ばかりで握るのが秘訣だ。それから別に鮭のアラマキを薄く切り、それを飯の上に載せて、その上から柿の葉の表を内側にして包む。柿の葉も鮭もあらかじめ乾いたふきんで十分に水気を拭き取っておく。それが出来たら、鮫桶でも飯櫃でもいゝ、中をカラカラに乾かしておいて、小口から隙間のないように鮫を詰め、押蓋おしふたを置いて漬物石ぐらいな重石おもしを載せる。今夜漬けたら翌朝あたりからたべることが出来、その日一日が最も美味で、二三日は食べられる。食べる時にちよつと蓼の葉で酢を振りかけるのである。吉野へ遊びに行った友人があまり旨いので作り方を教わつて来て伝授してくれたのだが、柿の木とアラマキさえあれば何処でも拵え

られる。水気を絶対になくすることと飯を完全に冷ますことさえ忘れなければいゝので、試しに家で作ってみると、なるほどうまい。鮭の脂と塩気がいゝ塩梅に飯に滲み込んで、鮭は却って生な身まみのように柔かくなっている工合が何とも云えない。東京の握り鮓とは格別な味で、私などにはこの方が口に合うので、今年の夏はこればかり食べて暮らした。それにつけてもこんな塩鮓の食べかたもあつたのかと、物資に乏しい山家の人の発明に感心したが、そう云ういろゝの郷土の料理を聞いてみると、現代では都会の人より田舎の人の味覚の方がよっぽど確かで、或る意味でわれゝの想像も及ばぬ贅沢をしている。そこで老人は追いゝ都会に見切りをつけて田舎へ隠棲するのもあるが、田舎の町も鈴蘭燈な

どが取り附けられて、年々京都のようになるので、そう安心して  
いる訳には行かない。今に文明が一段と進んだら、交通機関は空  
中や地下へ移つて町の路面は一と昔前の静かさに復かえると云う説も  
あるが、いずれその時分にはまた新しい老人いじめの設備が生れ  
ることは分りきつている。結局年寄りには引つ込んでいろと云うこ  
とになるので、自分の家にちゞこまつて手料理を肴に晩酌を傾け  
ながら、ラジオでも聞いているより外に所在がなくなる。老人ば  
かりがこんな叱言こいごとを云うのかと思うと、満更そうでもないと思え  
て、頃来大阪朝日の天声人語子は、府の役人が箕面公園みのおにドライ  
ヴウエーを作ろうとして濫みだりに森林を伐り開き、山を浅くしてし  
まうのを嗤わらっているが、あれを読んで私は聊いささか意を強うした。奥

深い山中の木の下の闇をさえ奪つてしまふのは、あまりと云えば心なき業である。この調子だと、奈良でも、京都大阪の郊外でも、名所と云う名所は大衆的になる代りに、だん／＼そう云う風にして丸坊主にされるのであろう。が、要するにこれも愚痴の一種で、私にしても今の時勢の有難いことは万々承知しているし、今更何と云つたところで、既に日本が西洋文化の線に沿うて歩み出した以上、老人などは置き去りにして勇往邁進するより外に仕方がないが、でもわれ／＼の皮膚の色が変らない限り、われ／＼にだけ課せられた損は永久に背負つて行くものと覚悟しなければならぬ。尤も私がこう云うことを書いた趣意は、何等かの方面、たとえば文学藝術等にその損を補う道が残されてはいはしまいかと思うから

である。私は、われ／＼が既に失いつゝある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼び返してみたい。文学という殿堂の檐のきを深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内装飾を剥ぎ取ってみたい。それも軒並みとは云わない、一軒ぐらいそう云う家があつてもよからう。まあどう云う工合になるか、試しに電燈を消してみることだ。



# 青空文庫情報

底本：「陰翳礼讃 改版」中公文庫、中央公論新社

1975（昭和50）年10月10日初版発行

1995（平成7）年9月18日改版発行

2013（平成25）年1月10日改版24刷発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第二十卷」中央公論社

1982（昭和57）年12月25日

初出：「経済往来」

1933（昭和8）年12月号、1934（昭和9）年1月号

※底本は新字新仮名づかいです。なお旧字の混在は、底本通りで

す。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2016年6月10日作成

2019年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 陰翳礼讃

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>